

鹿本農業高等学校 令和7年度(2025年度)学校評価計画表

1 学校教育目標						
時代の潮流に呼応した農業教育の実践校として、校訓「勤労・愛育・創造」の精神を基調に、確かな倫理観を持ち、協調性があり、心豊かで健やかな人材の育成を目指す。						
2 本年度の重点目標						
1 安全で安心な魅力ある学校づくり 2 学習習慣の確立・わかる授業の実践と学力の向上 3 キャリア教育の充実 4 基本的生活習慣の確立 5 生徒指導の徹底と生徒支援体制の確立 6 人権教育の推進 7 生徒会・学校農業クラブ・学校家庭クラブ及び部活動の活性化 教育スローガン 考える力、行動する力、発信する力の育成						
3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	地域社会の期待と信頼を高める学校づくり	教育目標及び重点目標の周知及び、特色ある教育活動の実践及び情報発信	・農業高校の役割と本校独自の教育活動をわかりやすく発信する。 ・本校のスクールミッション、教育目標等を保護者、地域、職員に認知させ、全学科合わせた募集定員の充足率50%以上を目標とする。 ・台湾高雄市の高級中学校との交流を促進する。	・計画的な中学校訪問の実施、地域連携、体験入学の実施。台湾との交流等、魅力ある学習内容をHP等で発信し、効果的なPR方法や農業高校ならではの魅力発信を行い、広報充実を図り、生徒募集に繋げる。 ・台湾の姉妹校の交流活動を実施しその様子等を地域に発信する。	B	・学校評価アンケート設問の「情報を発信し開かれた学校づくりに取り組んでいる」に対し、98%の保護者が「そう思う、大体そう思う」と回答し、教職員は100%であった。年間HP閲覧数は42万件を超え特色ある教育活動や学校行事を継続して発信できた。 ・7月から中学校訪問を実施し、山鹿市高校合同進学説明会への参加、体験入学2回実施に加え11月に公開授業週間を実施した。個別訪問者への対応も丁寧に行った。さらに、11月と1月には台湾高雄市の高級中学とのオンライン交流授業を行い情報発信に努めた。結果、前期選抜の志願者は50人となり昨年度と同程度となった。学校の取組を学校HPやSNSで発信してきたが、生徒募集への大きな効果にはなかなか繋がっていない。新たな学習活動、充実した学校行事等の実践を継続して発信していく。
	働き方改革の実践	ワーク・ライフ・バランスを実現できる環境を整え、時間外勤務時間を縮減し	・全教職員が働き方改革の必要性を理解し、月の時間外勤務時間の平均が上限の45時間以内、年	・外部専門機関の人材を活用する。 ・学校閉庁日、定時退勤日、部活動休養日等を設定する。 ・教職員1人当た	B	・特別支援教育支援員や教員業務支援員、SCやSSW、ICT支援員やキャリアサポーター等を積極的に活用した。 ・昨年同様、学校閉庁日を5日設定し、生徒

		、長時間勤務の解消	の時間外勤務の上限時間360時間以内を全職員実現する。 ・健康で働きやすい職場環境を整備する。	り年次有給休暇の平均取得日数10日以上の推奨。		保護者へ周知し実施した。部活動休養日は原則水曜日に設定、水曜日に会議日を固定、定時退勤日とした。 ・総時間外時数は1月末現在、月平均45h/月以上の職員数が7人（16%）、月の時間外勤務時間の平均が25：39で上限の45時間以内となったが、80h/月以上延べ12人で倍増した。今後も業務の見直しや効率化を図っていきたい。 ・1月末で、本校職員の61%が年間10日以上、年次有給休暇を取得し、取得日数の平均は約12日であった。
	業務改善への取組	子どもたちと向き合う時間を確保し効率的・組織的な教育活動の実践	・「すぐる」やタブレットの活用を促進した校務分掌業務及び会議や文書作成時間の業務を縮減し、教職員が本来の業務に一層専念できる環境整備を進め、業務を効率化する。	・DXクラウドを活用した文書管理の統一化の徹底を行う。ネットワークの活用により情報の共有を図り、会議、資料作成等の業務簡素化。 ・各種会議日を統一曜日時間に固定による業務の組織化を図る。	A	・情報セキュリティに関する職員研修を年度当初に実施。教務支援システム・校務支援システム・タブレット端末の活用によるデータの共有化を進め、業務効率化に繋がった。全職員がクロームブックを用いた授業研究等に取り組むことができた。各種アンケートの実施や朝会、各種会議でのペーパーレス化を進めた。RPAやすぐるの活用により文書事務や保護者連絡の簡素化ができた。 ・各種会議日を水曜日の定時に固定したことによる計画的な業務運営に繋がった。
学力向上	基礎学力の向上	学習意欲の喚起と家庭学習の定着	・朝自習と朝読書の実施により、基礎学習に対する満足度を80%以上にする。	・毎日の朝学習と朝読書ならびに各教科で課題の提出と添削指導、考査前の学習会などを実施し、家庭学習の定着を図る。	B	・学校評価の生徒アンケート結果から、基礎学力を身に付けるように努力している生徒は75%にとどまった。
	特別支援教育の視点に立った授業改善	学び直し、既習事項の定着	・学業不適応による転学者・中退者数を0人にする。	・生徒支援部および特別支援教育支援員と連携して、基礎学力および学習意欲の継続した向上を図る。	A	・学業不適応による転学者・中退者数は0人であった。
キャリア教育（進路指導）	キャリア教育に基づく教育活動の実践	社会の変化に対応する進路教育活動の推進と組織的なキャリア教育の推進	・外部講師による講話の実施と進路説明会への参加を通して、企業理解や進路理解を効果的に進める。 ・企業からの	・外部講師による講話や進路ガイダンス等への参加だけでなく、日頃の農業学習等により職業観や勤労観を高め、先進地視察等により社会を知り、インターン	A	・効果的な外部講師による講話の実施と進路ガイダンス等への参加だけでなく、先進地視察、インターンシップ、校外実習に加えて本年度初めて開催した業界理解の為の説明会で社会を知り、それぞ

			生の声を収集し、体験することで進路情報の細部を理解し、生徒自身の適した職業選択の精度を高める。	シップや校外実習で実践力を身に付けさせ、進路選択に繋げさせる。 ・企業の人事担当者や直接話をするだけでなく、経営者の生の声も聴き、企業の実態把握を行い、現状を生徒や教職員にも伝えて、進路選択のミスマッチを防いでいく。		れの職種等の進路理解に繋げ、進路選択にも繋げさせることができた。 ・企業からの生の声を生徒及び教師も収集することで、進路情報の細部や具体的内容を理解することができ、生徒自身の適した職業選択の精度を高めることに役立てることができた。加えて、昨年度同様に応募前職場見学へも積極的に参加させることで雇用のミスマッチへの対応も図った。
	人権尊重の進路指導教育	生徒一人ひとりの潜在能力を引き出すことでよりよい職業観、勤労観、向学心を確立させて幅広い進路を選択決定	・2、3年生の個人面談を適宜実施し、進路希望先の理解と適性などの自己を見つめる機会とし、進路選択のミスマッチを防止する。 ・進学希望者対象の学習会を充実させ、進学先において必要な学びの基礎を身に付けさせる。	・個人面談はキャリアサポーター、進路指導部職員及び担任で実施し、三者面談は3年時には2回実施する。 ・応募前職場見学へ積極的に参加させる。 ・進学希望者対象の学習会は、特に小論文と討論会、発表会を充実させ、自らの考えをまとめ表現する力を養成する。 ・手帳保持者へはハローワークを招いた説明会を実施し、応募前の見極め実習を充実させて進路選択のミスマッチを防いでいく。	A	・個人面談を1学期と3学期の2回実施することで2・3年生の進路希望を直接把握できた。また、三者面談は3年時7月だけでなく、適宜実施することで、生徒・保護者・担任の共通理解を得ることができた。 ・応募前職場見学には昨年度に増して積極的に参加させることができた。 ・進学希望者対象の学習会は、特に小論文と討論会、発表会を取り入れ、自らの考えをまとめ表現する力を養成することができた。 ・手帳保持者への指導の流れを令和3年度に作成したものに就いてハローワークを招いた説明会を実施したり、開示等の意思確認書等を提出させたりして進路選択のミスマッチを防ぐことに努めた。
生徒指導	生活指導の徹底	基本的な生活習慣の確立	・自ら率先して挨拶ができる生徒の育成。 ・時間を守り遅刻・欠席をさせない。	・毎日の登校指導において声掛けや遅刻チェックを行い、気になる生徒と面談を行い、昨年度の遅刻数の1割減を達成する。	C	・挨拶は良くできていると感じるが、2学期以降の遅刻者の固定が目立っていた。毎日のように遅刻する生徒が数名いる（自分で遅刻連絡を入力する）。
		交通安全に対する意識の向上	・外部機関との連携を図り正しい交通ルールを学ぶ。	・生徒会の交通安全委員会の呼びかけ。 ・スタントマンによる交通安全教室の実施。	A	・梅雨時期の交通安全委員会からの校内放送による注意の呼びかけ、スタントマンの交通安全教室等交通講話の効果があった。
	適応指導の充実	転学、中途退学者の減少	・1年生の転学、中途退学者の割合を10%以下にする。	・入学前からの生徒情報収集と職員間の共有を図り、外部機関との連携と支援を充実させる。	A	・SCとの連携やSSWとのつなぎなど支援部や保健部との連携を図りながら保護者への対応も丁寧に行っている。

				・ケース会議等を定期的に実施する。		・課題がある生徒に対しての共通理解の必要性があるときは早めにケース会議を実施している。
	組織的指導の推進	情報を共有し、生徒理解と職員間の共通認識の向上	・全職員で生徒指導に取り組み、職員間による指導差をなくす。	・学年会やいじめ防止対策会議の情報共有を図り、全職員による共通理解を深める体制を構築する。	A	・SNSによるいじめ事案が数件あった。書き込みは夜の時間帯に上げられていることが多く、家庭との連携が不可欠である。
人権教育の推進	人権教育の充実	部落差別（同和問題）をはじめ、あらゆる人権問題についての学習やいじめの防止に向けた取り組みを実施し、差別、いじめを許さない態度の育成	・人権教育HR活動や講話、掲示物などを通して、全ての生徒や教職員、保護者が自分の事として捉え、あらゆる差別やいじめ問題について許さない言動ができる。	・各学期の人権HR活動や講話、研修等により、生徒及び職員の人権意識を高める ・保護者向け人権だよりや人権講話の案内を行い、保護者の人権意識を高める。	A	・今年度は事前学習や校内掲示を工夫しながら、各人権課題について自分事と捉えるよう取り組んだ。 ・「すぐる」やHPなどを活用し、人権学習の状況を発信できた。人権講話については、「すぐる」にて案内を周知したが、保護者の参加はなかった。次年度は案内を紙媒体でも行い、周知の徹底を図りたい。
いじめの防止等	命を大切にすることを育む指導	生命尊重の意識と自己有用感の向上	・全ての生徒が自他の生命を尊重し、認め合う雰囲気作りを行う。 ・いじめ早期発見と全てのいじめ事案解決を組織的に行い、該当学期中の解消に努める。	・授業のUD化などをおして、わかりやすい授業を行い、生徒の自己肯定感を高める。 ・学期1回「心のアンケート」調査と、調査当日にいじめ防止対策委員会の実施により早期発見し、組織的に対応する。	A	・職員研修を通して、人権を尊重する授業の実践を行うことができ生徒の自己肯定感を高めることができた。 ・調査当日にいじめ防止対策委員会を実施し速やかに情報共有できた。突発的な事案についても速やかに情報共有できた。次年度は、情報共有後の対応について見なおしていきたい。
	他者の心情を理解する人間性を育む	人間関係の構築と学校づくり	・言語環境を整備する。 ・全ての生徒が相手を尊重した言動を取れるようになる。	・言語環境に関する情報発信を校内掲示やHPなどを活用し毎月実施する。 ・「心のきずなを深める標語」を全校生徒及び職員で作成し、校内掲示など行う。 ・いじめ等の個別の事案に対して生徒指導部や生徒支援部など各部と連携し、対応する。	A	・校内掲示だけでなくクラス掲示等も行い、言語環境を整えた。鹿農祭でも、代議委員会を通じて人権に関する展示物を作成できた。 ・いじめ等の個別の事案に対して、学年など各部と連携して取り組むことができた。次年度も引き続き連携できるよう日ごろから情報共有を図っていきたい。
特別支援教育	特別な支援を要する生徒への適切な対応	組織的な支援計画及び指導計画の作成と確実な支援の実施及び評価	・支援を要する生徒について、中学校からの引き継ぎを活用して支援計画及び指導計画を作成し、切れ目のない支援を行う。	・SC、SSW等外部機関と連携し、特別な支援を要する生徒にケース会議等を実施し、確実な支援を行う。 ・校内委員会を毎週開催し、支援の成果と課題を確認	A	・組織的な支援計画及び指導計画の作成において計画通り実施することができた。外部との連携は今年度も、SC（60時間）、SSWとの連携（3件）、ケース会議の実施（6回）など多くの対応をすることができた。昨年度か

			・支援を要する生徒が安全で安心して学べるよう特別支援教育支援員や外部専門機関と連携し合理的配慮を行う。	・共有し、指導計画の修正を適宜行い、関係職員にて評価・再検討を行う。 ・様々な特性を抱える生徒が主体的に授業に取り組めるよう授業のUD化・授業支援を行う。		・引き続き特別支援教育支援員が配置されたことにより、困り感を抱える生徒の授業支援や環境整備、職員への助言をいただき、より個に応じた支援ができた。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	コミュニティ・スクールにおける学校運営協議会の推進と広報活動の推進	学校運営協議会で本校の魅力化や特色作り、発信等に向けた議論が行われて、共通理解と協力体制の構築により、教育活動の活性化に繋げる。	・本校の魅力化や特色作り、活動内容の発信等に向けた議論が行われ、地域における教育資源の活用と交流活動を推進し教育活動の活性化に繋げる。 ・幼、小、中学校との交流や学習支援活動、生産物販売をととした地域との交流活動を推進する。	・各委員から幅広く意見を伺い、学校運営に活かし、学校課題の解決についての評価を行う。 ・学習支援活動、学校行事などの各種イベント等の地域交流・地域貢献活動を積極的に行う。	B	・年間2回の会の開催や公開授業、文化祭などの学校行事、さらには日常的教育活動を参観していただき、課題解決に向けたご意見や評価を受けた。これらを次年度の特色ある教育活動や地域連携の具体的な目標設定へとつなげる総合的な取り組みとする。 ・近隣保育園や小学校との交流学习や地域イベントへの出演、生産物販売等を積極的に行い、地域とのつながりを深めながら生徒の主体性やコミュニケーション能力が向上した。
		広報活動の充実	・HP、SNSを活用した広報活動の充実を図り、特色ある学習活動の発信を行う。	・本校の公式Instagramで写真や動画(ストーリー)をアップし、発信数を増やし、フォロワー数800以上を達成する。 ・HPを活用し、各種行事、各学科の学習状況を更新し情報発信を強化年間閲覧目標数25万回以上を達成する。	B	・Instagramへの投稿をタイムリーに行ってきたが、フォロワー数は655と目標を達成することができなかった。 ・学校HPは2月末現在で250件の記事を投稿し、閲覧数は42万回となり目標を大きく上回った。
環境教育	環境問題への意識向上及び校内美化の推進	学校版環境ISOの取り組みを通じた環境維持・保全に寄与する態度の育成	・ゴミ分別の徹底とりサイクルの推進。 ・電気使用量を削減する。	・ペットボトル分別(ボトル・キャップ・ラベル)の習慣化に向け全クラス分別率70%以上を目指す。 ・近年の地球温暖化を鑑みできる範囲で節電に努め電気使用量を前年度比1%減を目指す。	B	・年度当初はクラス毎に分別率にばらつきがあったが、見回りチェックを行い、1月現在の分別率は97.9%だった。 ・保健委員から節電を呼びかけ、夏季を中心に電気使用量が削減でき前年度比-2%となった。
保健管理	健康教育・保健教育の推進	心身の健康に関する生徒自身の管理能力の育成	・健康診断事後の措置を徹底する。 ・保健室に来室する生徒が	・個別指導、生徒保健委員会による啓発活動等の実施、また学校医等との連携を行い歯科・視力共に受診率40%以上を実現する。 ・保健室来室生徒	B	・複数回の個別指導、学校医との連携による生徒保健委員会活動等を行い視力の受診率は52.4%、歯科58.3%となった。 ・生徒支援部と連携を

			安心安全に学校生活が送れるよう、生徒支援部・SC・SSWと連携する。 ・外部専門家による講演会を実施する。 ・生徒保健委員会活動を活性化及び発信力を強化する。	の状況を見極め、生徒支援部と連携し、必要に応じてSC・SSW等に繋げる。 ・DV未然防止教育講演会、薬物乱用防止教育講演会に専門家を招聘し、正しい知識を身に付け実践できる力を高める。 ・発信力強化のためお昼の放送の利用や動画の保健だより作成を行う。		行い、現時点でのSC利用者は延べ79人。継続利用者6人。保護者の利用は2人と少なくSC来校日をすぐーるで伝えていく必要もある。 ・各専門家による講話を実施し生徒の感想からも今後の人生に活かせる正しい知識と新たな発見を得られる貴重な機会となった。 ・新たにお昼の放送は実施できたが、動画の保健だよりには取り組めなかった。
専門教育（農業）	農業教育の充実	魅力ある農業教育の実践	・スマート農業や新たな生産技術や商品開発の研究を行う。 ・地域交流学習の実践と発信力の強化。 ・地域との連携（幼保小中、福祉施設） ・大学との研究での連携。	・外部講師の利用や農高農大一貫プロジェクトの推進。また、地元産農産物の利用促進と産業廃棄物の利用による環境負荷低減に取り組む。 ・地域の魅力を学び発信できる能力の育成。 ・学んだことを生かして、地域貢献と有用感を育む教育。 ・データ分析等で大学等と連携し、プロジェクト活動に活かし、進路にもつなげる。	A	・ロボットアイデア甲子園熊本大会SMC賞受賞（2年連続入賞）。 ・幼稚園、小中学校との地域交流学習ができた。 ・大学や県立農大との連携した取組ができた。 ・博学連携事業として県立装飾古墳館と定期体験教室を3回実施できた。
	地域を担う人材育成の充実	就農者及び地域産業を担う人材の育成	・農業経営者及び地域産業と連携しながら、地域に根ざした教育活動の実践。	・地域人材や地域資源を教育活動に活用しながら地域理解や産業を知る機会とする。	B	・2年生の現場実習・インターンシップを実施し、地域を担う人材育成の良い機会となった。 ・稲作農家や野菜農家でのアルバイトができた。農業普及指導課とJAとの連携により就農を促進する取組みの一環である。
	学校農業クラブ、学校家庭クラブの活性化	活動の充実、今年度、年県連年次大会の成功に向けた取組	・大会での成績向上並びにクラブ員としての意識を高める。 ・県連年次大会の成功に向けての機運を盛り上げ、発表者と運営者の双方にとって思い出に残る大会とする。	・生徒が自発的かつ主体的に活動できる指導体制と計画を練り、クラブ組織を強化する。 ・発表運営及び審査会において滞りなく実施するために県連年次大会実行委員会での計画を基に生徒と職員意識向上を図る。	A	・学校農業クラブ活動では、県連事務局校として、年次大会を成功させることができた。 ・九州大会意見発表での最優秀賞をはじめ、各種大会でも最優秀賞の獲得ができ、全国大会へつながった。 ・学校家庭クラブではなくもと環境賞受賞の他、服のチカラプロジェクトに全校あげて取組み、多くの服が集まった。

4 学校関係者評価

○本を読む時間が少ないのではないかと。自分でストーリーを作って、学びをつなげていく学習をして欲しい。現代は、自分が知りたい情報だけをデジタル媒体で見ることが多いので、多角的に物事を見るようにしてほしい。

○校則の再認識が必要ではないかと。学校評価アンケート結果に「スカートの長さ」「ピアス」について保護者が学校に指導してほしいと書いてあった。学生は学生らしくして欲しい。少数派のせいで頑張っている生徒まで非難されるのはかわいそう。度がすぎるようなことは指導されていると思うが、生徒に自分の身なりを見てどう思うかを考える機会を作って欲しい。

○中学校でも技術の授業でA Iを使っている。技術の授業限定でA Iに頼ってしまうと思わなくなってしまう。子どもたちは、自分の考えや表現で主体的に取り組む必要がある。「A Iは便利」ということは伝えていく必要がある。匙加減は難しい。読書感想文などをA Iでつくってくる子もいるのではないかと。

○去年から生徒数が増えているような気がしている。人気がでてきたのでは。先生方の取組や対応をもっとアピールして欲しい。先日は1年生が山鹿探訪をしてくれ、山鹿の良さを再認識していただきありがたい。

○鹿本農業高校は手厚い指導をされているので、もっと魅力を発信してほしい。例えば、卒業生が出ているDVDの映像を見ると親近感が湧いて希望者数が増えるのではないかと。動画の時間は5分間くらい。もっと中学校に攻めの生徒募集をしてほしい。

○一部の先生方の残業時間が多いが、働き方改革に向けた具体的な取組はしているのか。人によって仕事の仕方が違うので難しいと部分も多いと思うが。

○これからの農業は「脳」業。鹿本農業高校は実体験ができる高校である。生徒に体感して欲しい。卒業してすぐにではなくても、将来的に農業に就いてもらえるような取組をお願いしたい。

○マスコットキャラクターを制作されたことはとても良い取組だと思う。マスコットキャラクターを使ったアニメや着ぐるみを作ると学校P Rに繋がるのではないかと。

○若い世代はTikTokをよく見ているので、TikTokでの情報発信も検討してみてはどうか。

5 総合評価

○一昨年度から学校評価アンケートを「Forms」で実施したことで、生徒90.6%、保護者88.1%と高い回答率が得られ、スマートフォン等を活用した回答方法が浸透してきたと考えられる。設問への肯定的回答は生徒80.2%、保護者94%であり、本校の教育活動に対する理解と協力が得られていることがうかがえる。

○広報活動では、中学校訪問や新パンフレットの配布、合同進学説明会への参加、7月・10月の体験入学、9月・11月の公開授業週間を実施した。また、学校ホームページを日々更新し、年間閲覧数は42万件を超えた。定員充足率は前年度を上回ったものの50%には届かず、次年度は台湾との交流など本校独自の取組を生徒自身が発信できる仕組みを検討していく。

○学習面では、「授業や学校行事に意欲的に参加している」と回答した生徒が91%、「朝自習・朝読書に取り組んでいる」と回答した生徒が77%、保護者が82%となり、昨年度より向上が見られた。タブレット活用や授業のUD化に取り組んだが基礎学力の定着には課題が残るため、キャリア教育を意識した授業展開を進め、「個別最適な学び」の実践を強化していく。

○生徒指導・人権教育では、生徒指導部、生徒支援部、人権教育主任が連携し、生徒理解研修やいじめ防止の取組を進めた。学期ごとに「心のアンケート」を実施し、情報を基に委員会を開いて早期対応に努めた。また、標語募集や掲示による言語環境の整備も行い、「人権意識が高まっている」と回答した生徒93%、保護者90%という成果が得られた。

○生徒支援では、1年生全員を対象としたスクールカウンセラー面談（60時間）、SSW申請、外部機関を交えたケース会議を実施し、継続支援が必要な生徒へのチーム支援を強化した。特別支援教育支援員の活用により、学習の困り感への支援や環境調整が進み、個別に応じた支援が可能となった。

○進路指導では、4年制大学4名、農業大学校2名、専門学校7名と34%が進学し、就職ではキャリアサポーターによる企業開拓や外部講師の講話、進路説明会を実施した。応募前職場見学の活用や個別指導により、学校紹介での内定率は100%となり、離職率の低減にもつながった。

○専門教育では、「農業への理解が深まり、専門的知識・技術が身に付いている」と回答した生徒が84%であった。インターンシップや外部講師の活用、専門機関との連携により、各学科で専門性を高める学習が展開され、農業クラブ活動での上位入賞にも結びついた。また、小学生向け体験講座など地域に開かれた活動も行い、専門教育の魅力を発信することができた。

6 次年度への課題・改善方策

○次年度は、スクールミッションおよび教育目標の再周知を図り、地域社会からの期待と信頼を高める学校づくりを推進する。教科指導や学校行事の改善を通して学校の魅力を向上させ、生徒募集につながる新たな具体策を検討しながら実施していく。

○学習指導面では、基礎学力の向上が依然として課題であることを踏まえ、整備された教育環境を最大限に活用し、タブレット等のICT機器を効果的に取り入れた授業改善を進める。指導と評価の一体化や観点別評価の研究を継続し、カリキュラムマネジメントの検証を行いながら、

確かな学力の定着を図る。また、研究授業週間や公開授業を計画的に設定し、教員の指導力向上を促進し、進路実現につながる学力保障を強化する。

○「総合的探究の時間」は年間計画に基づき、地域の魅力発見や課題解決を目指す探究的な学習を深化させる。特に台湾との交流を軸に、情報収集・整理・分析・発表の力を育成し、地域や国際社会との関わりを通して主体的に課題を見出し、解決に向けて行動できる生徒の育成を目指す。

○進路指導においては、学年ごとの重点目標を明確にし、進路情報の収集・周知、キャリアサポーターの活用などを通して個別最適な進路指導を行う。支援が必要な生徒から進学希望者まで幅広く対応し、進路選択のミスマッチを防ぎ、早期の進路目標達成につなげる。

○特別な支援を要する生徒への対応として、生徒理解研修や個別の支援計画の適宜見直しを継続し、新入生を含めた生徒の実態把握を早期に行う。全職員で情報を共有し、切れ目のない支援体制を構築することで、課題の早期解決を図る。また、いじめ防止基本方針を再確認し、早期発見・早期対応を組織的に行之、生徒が安心して学校生活を送れる環境づくりを推進する。

○専門教育については、特色ある学習内容の充実を図り、日頃の学習成果を地域に発信することで、地域産業界との連携を強化する。地域の産業を担う人材育成を進め、生徒の進路実現にもつなげていく。

○学校運営協議会では、スクールミッション・スクールポリシーに基づき、地域の人的・物的資源を活用した教育支援活動を活性化し、学校課題の解決と学校の魅力化を推進する。さらに災害発生が予想される中で、生徒の命を守るために危機管理マニュアルを随時検証し、地域と連携した防災体制の整備を進める。

○人権教育では、相手の立場や心情を理解し、人権を尊重する豊かな感覚を育むために、人権LHRや講演会の内容を随時見直し、より充実した取組とする。全職員が生徒一人ひとりの状況を共通理解し、生命の尊重と自己有用感の向上を目指した教育を推進し、組織的な体制強化と研修の充実を図る。

○継続的な取組として、本校の特色ある学習内容や新教育課程をわかりやすく発信し、中学生や地域からの理解を深める機会を増やす。生徒の生き生きとした学校生活の様子を積極的に情報発信し、生徒が自ら表現できる力を育てることで学校の活性化を図る。さらに、生徒一人ひとりの進路希望を実現することで、保護者や地域の信頼を高め、本校の魅力として生徒募集につなげていく。